

巻頭言「形而上学への意識」

荒井康全（上席化学工学技士）

おもえば「システム (System)」という術語に日本の哲学者は「体系」と翻訳したがその後、本来の出自を、わすれてしまっていたのではないかと最近思うようになった。最近、筆者はアリストテレスからカントに至るまでを振り返って、彼らがこの術語を、思考の構造形式という意味で、一貫して使ってきたことを知る。

この骨組みには二つの大黒柱があることらしい。ひとつは、Noumenon（可想体）と、もうひとつは Phenomenon（可視体（現象体））で、その双対構造で、思考システムの構成をしようとしていることである。二つ目は、そこでの思考対象に対して‘整理筆筭’としての「カテゴリー表」という、知るべきことを秩序（概念、判断、理念）形式という抽斗を設け、これに‘衣を畳んで’納めるとするものである。

こうして具象と抽象の間の思考操作の行き交う「家」（構造形式）を描き、このような思考の枠組みを「システム」という語で意識したといえよう。哲学者はその「家」の構造と機能形式を示してその骨組みと部屋の間取りの設計ガイダンス（あるいはマニュアル）を造ったのである。これは「静的世界構造システム」といえよう。

現代での「システム」概念は情報科学によって、いっきよに‘動的な’世界構造に転換したのではないかと思う。それは、物理的情報概念として「記号・信号」を位置づけたことに拠るものであろう。システム概念の基本構造を入力→対象モデル→出力という高度に抽象化した形式的場を情報信号で結ぶという点で、特に「可視体（現象体）」のなかの思考機能を構造化（記述モデル化）したと言えよう。人間の認識過程という視点で見ると、特に N. Wiener（ウィーナー）等は、フィードバック（負帰還信号）理論によって、対象の仮説モデル形式を編み出し、これによって古典的な静的世界が、「動的な世界システム概念」に衣替えしたといえよう。別な見方をすれば、思考対象を仮説的なモデルとしてとらえ、そこに含む人間の過ちを動的に修正していく認識方式であり、そしてそれ自身が対象操作方式を与え、さらに最適出力への入力探索法も与えることを可能にしている。

われわれは、上述の「可視体（現象体）」に思考意識の重心を置きつつも、自由や価値意識に代表されるような人間の内面的思考である「可想体」側にも、強く意識の軸足を掛ける必然性があることに思いを致す。このように考えてみると現代の「動的な世界システム概念」の命題は二つの「体」をつなぐ「総合知」そのものの知的活動ドメインのなかで、その地平を暗示していると言える。本学会は、現代文明社会の諸課題を自然および人文科学の知の融合として思考する方向性について共有するものであるが、学会外との広い発信を含め、その優れた叡智と琢磨された知識の交流もとで、徹底的に考えぬかれる「形而上学への意識」への新しい超克が挑戦されるべきことを、あえて提唱するものである。